

第46回

日本ケルト学会

研究大会 プログラム



日時: 2026年10月17日(土)～18日(日)

会場: 福岡女学院大学

(福岡県福岡市南区日佐3-42-1)

会場: 3号館321教室・322教室

主催: 日本ケルト学会

大会責任者 島居佳江 (福岡女学院大学短期大学部)

連絡先 shimai@fukujo.ac.jp

どなたでもご参加いただけます(会費無料)。

ハイブリッド形式で開催します。講演・発表は会場で行いますが、オンラインでも視聴できます。リンクについては、会員MLにてお知らせします。

第46回 日本ケルト学会 研究大会 プログラム

10月17日(土)

12:30～	受付開始	
13:00	開会挨拶	代表幹事 小池剛史
13:00～13:45	研究発表 1	Taliesin and the Waters: Poetry, Prophecy and Metamorphosis 発表者 Amy C. Mulligan 司会 小池剛史
	休憩	15分
14:00～16:45	フォーラム・オン	水辺、鳥、声 — トールキンの妖精表象 司会・趣旨説明 島居住江
	発表 1	fairy 概念の言語的変遷とTolkienの用法 発表者 伊藤 尽
	発表 2	『星を飲んだかじや』の妖精国とトールキンの預言者像 発表者 島居住江
	発表 3	天からの声 ロマン主義的託宣のイメージとトールキン 発表者 高橋 勇
	発表 4	「ケルティック」トールキン—文学的「ケルト」のファンタジー的昇華 発表者 辺見葉子
18:30	懇親会	
	もつ鍋ながまさ 博多本店（福岡市博多区博多駅前3-18-8 ブルク博多駅前 1F北） 092-431-0002	

10月18日(日)

10:00～	受付開始	
10:30～11:15	研究発表 2	『ブリクリウの饗応』 <i>Fled Bricrenn</i> とケルト的伝統?について 発表者 平島直一郎 司会 森野聡子
11:15～12:00	研究発表 3	「聖母の恵みが貧困を退ける」 —ハイランド土地戦争におけるカトリック教会の役割 発表者 山田祐育 司会 山本信太郎
12:00～12:15	総会	
12:15～13:15	昼食	
13:15～14:45	講演	アイルランドのプロテスタント考 講演者 佐藤 亨 司会 平島直一郎
14:45	閉会の辞	大会責任者 島居住江

講演

アイルランドのプロテスタント考

On Protestants in Ireland

講演者：佐藤 亨

(青山学院大学教授)

Toru Sato

Professor, Aoyama Gakuin University

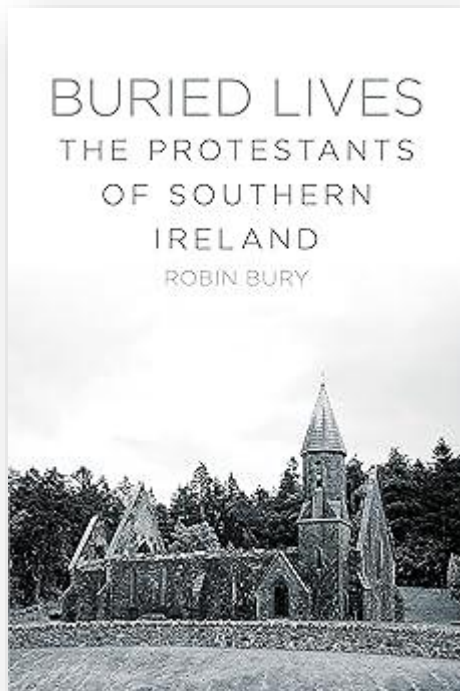
2011年のことである。ベルファストの友人が「南のプロテスタントはアイルランド人だ」と言った。この発言は「北のプロテスタントが英国人だと主張しているのに比べ」という但し書きが要る。また、「アイルランド人だ」という意味は「南のプロテスタントは少数派ゆえにアイルランドならびカトリックに同化している」ということのようにだった。

また、同年、エリザベス女王がダブリンを英国君主として100年ぶりに訪れたが、その祝典の一部（復活祭蜂起の犠牲者追悼式）に招待された北アイルランドのプロテスタント系武装組織の元リーダーは、ダブリンに行くと緊張するといった旨の発言をした。

以上、他愛もないエピソードだが、これまでそうした話をもとに、自分なりにアイルランドのプロテスタント像を造形してきた。また、私の場合、北アイルランド研究を長年行っており、カトリック系住民との比較において、北部のプロテスタント系住民について考えてきた。

最近、Robin Bury, *Buried Life: The Protestants of Southern Ireland* (The History Press, 2017) を読み、自由国成立時、多くのプロテスタントがアイルランドを去ったことを知った。また、2021年の北アイルランド国勢調査では、カトリック系住民がプロテスタント系住民を上回った。

私のプロテスタント像は揺らぎつつある。今回はアイルランド南北のプロテスタントについて、ケルト復興、ユナイテッド・アイリッシュメン、北アイルランドの現状など、これまで自分が行ってきた研究をもとに話したい。



フォーラム・オン 趣旨説明

水辺、鳥、声 — トールキンの妖精表象

Voices and Birds on the Shore: Tolkien's Faërie

本フォーラムは、J. R. R. トールキンの妖精 (Faërie) 表象とその「ケルト性」を、「水辺」「鳥」「声」という共通のモチーフを手がかりに、文献学・神学・ロマン主義詩・ケルト学の四つの視座から検討する。第一発表は、若きトールキンが構想した Eriol の航海譚から『指輪物語』、『妖精物語について』、『星をのんだかじや』へと至る fairy 概念の言語的変遷を追ひ、ゲルマン語話者が希求した「ケルト的」妖精観を跡づける。第二発表は、『星をのんだかじや』のかじやを旧約の預言者像になぞらえ、召命・ヴィジョン・証言・継承の四局面から、妖精の国の体験に根ざした使命のかたちを読み取る。第三発表は、Shelley、Keats、Marvell からロマン派詩に現れる「天からの声」と「妖精の岸辺の鳥」のトポスを辿り、トールキンの「水辺の鳥(エルフ)」表象への接続を論じる。第四発表は、Arnold の「ケルト的魔法」論を背景に、『聖ブレンダンの航海』と『星をのんだかじや』を結び、西方・水辺・樹・鳥・声に結晶した独自の妖精論を考察する。これら四発表を通じて、トールキンの妖精表象における「ケルト的」様相の一端を、多角的に照らし出すことを目指したい。

(文責: 島居佳江)

フォーラム・オン発表

fairy 概念の言語的変遷と Tolkienの用法

発表者: 伊 藤 尽

(信州大学人文学部教授)

Tsukussy Jinny Ito

Professor of English Philology, Faculty of Arts, Shinshu University

20代の若き J. R. R. Tolkien が戦傷の癒やしの中で懐胎した「失われた遊戯の小屋」(‘The Cottage of Lost Play’)]には、ゲルマン語話者 Eriol がエルフの土地に赴き、幻想的な物語を受け取る経緯が設定された。当初は英語話者の祖先の土地アンゲルンから船出して辿り着いた土地、ブリテン島こそが人類の失った物語や神話が伝わった土地とされたが、後に Eriol は古英語話者に設定を変えられ、大西洋の失われた土地アトランティス、アーサー王伝説の系譜にある Avalon に、伝説継承の土地が設定し直された。Eriol の設定は、後の *The Lost Road*、*The Notion Club Papers* まで継承された後に廃棄された。結局、エルフの伝承はイングランド人の文化を持つホビットたちの書物に「書き残」され、『指輪物語』に「編纂」されて英語話者の知的財産となる。それとは別に「子ども部屋」に追いやられた物語にも、「真実」の「妖精の国 (faerie) 的」或いは「ケルト的」と呼べるものが継承され続けたことを、文献学者トールキンは論考『妖精物語について (On Fairy-stories)』及び『星をのんだかじや (Smith of Wootton Major)』に結晶させた。古英詩 *Beowulf* にケルト的魅力を見出したゲルマン語系言語話者トールキンが求めた「ケルト」的妖精論を紹介したい。

『星を飲んだかじや』の妖精国とトルキンの預言者像

Faërie in *Smith of Wootton Major* and Tolkien's Figure of the Prophet

発表者： 島 居 佳 江
(福岡女学院大学准教授)

Yoshie Shimai
Associate Professor, Fukuoka Jo Gakuin University

本発表は、トルキン最晩年の小品『星を飲んだかじや』のかじやを、旧約聖書の預言者像になぞらえて読む可能性を探る。本作は「妖精」の意味を説明するために書かれた経緯をもち、『指輪物語』とは異なる独自の恩寵観を示す。考察は四つの局面から成る。召命では、かじやは自らの意志や功績によらず、非合理かつ受動的な経緯で妖精の星を授かり、その選びにはエレミヤやイザヤと響き合う摂理が仄めかされる。ヴィジョン体験では、妖精の国で「美と恐怖の両方」に触れ、戦わず武器も造らない学ぶ者・探求する者として形成される。証言では、自覚なきまま妖精の国の香りを運び、作品と歌を通じて村の共同体へ間接的に恵みを伝達する。継承では、血の繋がらぬ子への公平な譲渡により、使命が個を超えて次代へと渡される。これら召命・ヴィジョン・証言・継承の四局面は預言者像と構造的に照応し、トルキンが妖精物語というジャンルに信仰の本質を織り込んだことの証左となる。かじやは英雄でも聖人でもないが、選ばれ、見、伝え、委ねた者として預言者の使命を静かに生きた人物として読みうる。

天からの声 ロマン主義的託宣のイメージとトルキン

Voices from Heaven: Romantic Imagery of 'Divine Messages' and Tolkien

発表者： 高 橋 勇
(慶應義塾大学文学部教授)

Isamu Takahashi
Professor of English, Faculty of Letters, Keio University, Tokyo

P. B. Shelley は 'Ode to the West Wind' において、イタリアにいる自身の声がダンテのそのように世界中へと拡散されることを祈った。こうした「声」を伝えるというトポスは、Tolkien が親しんでいたはずのロマン派詩にはよく見られるもので、同じく Shelley の 'To the Skylark' では見えないところから伝えられる「天の声」、つまり預言としてのひばりの声を伝統的な形で描いている。声によって見えないところから神のこぼれ、あるいは「悦び」を伝える鳥には小夜啼鳥がいるが、こちらは John Keats が 'To the Nightingale' で早朝の場面として描出した。その後半部分で、小夜啼鳥が見せる光景は「魔法の窓から覗ける打ち捨てられた妖精の岸边」と言われている。この「妖精の岸边」と「鳥」の、ケルティックといえる関係性はさらに、Andrew Marvell の 'The Garden' で七色の羽をもつ鳥として描かれる「人間の魂」を経て、Tolkien の「水辺の鳥(エルフ)」の表象に接続できるといったことを論じたい。

「ケルティック」トルキン—文学的「ケルト」のファンタジー的昇華

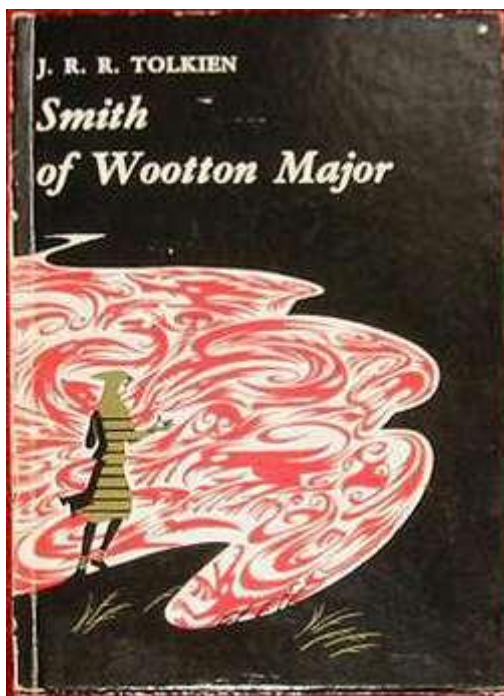
“Celtic” Tolkien – “Celtic” fairy tradition and Tolkien’s Faërie

発表者： 辺 見 葉 子
(慶應義塾大学名誉教授)

Yoko Hemmi

Professor Emeritus, Keio University, Tokyo

Tolkienが自らの神話・妖精物語に「ある人たちが『ケルティック』と呼ぶ澄明で捉えどころのない美」を与えたい、「ただしそれは本物の古いケルト語の文献には滅多に見つからないものだが」と述べた時、念頭にあったのは、Matthew ArnoldによるKeatsの‘magic casements, opening on the foam / Of perilous seas, in fairy lands forlorn’を‘Celtic magic/natural magic’の粋とする賞揚であろう。Tolkienは妖精の国の本質をKeatsと同様‘perilous’と表現しているが、Tolkienにとっての妖精・妖精の国におけるロマン派詩人的な水脈と、その「ケルティック」とされる淵源について、『聖ブレンダンの航海』を自らの神話物語と接続させた*The Notion Club Papers*中の「聖ブレンダンの死」(「航海譚(イムラウ)」、およびTolkien独自の妖精物語論を反映した『星をのんだかじや』における、西方、水辺、樹、鳥、声／妖精の歌声といった表象に焦点を当て論じたい。



研究発表 1

Taliesin and the Waters: Poetry, Prophecy and Metamorphosis

発表者: Dr. Amy C. Mulligan

Associate Professor, Department of English, University of Notre Dame)

Elis Gruffydd's sixteenth-century *Cronicl o wech oesoedd* ("Chronicle of the Six-Ages [of the World]") preserves the first extant narrative detailing the origins, birth, transformation and feats of the legendary sixth-century Welsh poet-prophet Taliesin. This paper focuses on the motif of water – as element, conduit, topographic feature and transformative matrix – and how it operates across *Ystoria Taliesin* and other Taliesin material, medieval to modern. I parse how waters, and movement through them, are instrumental in multiple Celtic accounts of the poet-prophet and elite verbal, textual and artistic production.

The analysis first considers early analogues: recourse to the established vernacular Irish genre of *immrama* ('rowing about') and Hiberno-Latin voyage tales (*Navigatio Sancti Brendani*) illuminates the significance of water as motif and matrix. Welsh literary tradition lacks a discrete "voyage" genre, yet I contend the Taliesin account is conversant with other medieval insular conceptions regarding water's transformative power and role as conduit between human and otherworldly spaces, Judeo-Christian and otherwise. Secondly, I argue for the broader influence of accounts like the biblical prophet Moses's own river-voyage. Elis Gruffydd's narrative aligns Taliesin with prophet-magicians whose fame extended well beyond the Irish Sea region.

The paper concludes by turning to ecocritical scholarship; I maintain that early Celtic narratives provide models for thinking ecocritically about transformational human relationships with the watery environment. This theme is developed in later Taliesin accounts in intriguing ways. For instance, transhistorical exploration of Taliesin evidences an enduring interest in how water imparts agency to marginalized figures who bridge multiple worlds – this fired Elis Gruffydd's imagination, I argue. I end with recent developments of the Taliesin myth which position water as an otherworldly elemental source that enables exceptional artists and poets to create. Indeed, this early Welsh poet-seer inspired projects such as visionary architect Frank Lloyd Wright's influential Taliesin home and school.

研究発表 2

『ブリクリウの饗応』 *Fled Bricrenn* とケルト的伝統?について

Über "Fled Bricrenn" und die keltische Tradition?

発表者: 平 島 直 一 郎

(西南学院大学)

Naoichiro Hirashima

Seinan Gakuin University

初期アイルランド文学作品『ブリクリウの饗応』 *Fled Bricrenn* はアルスター物語群に属し、比較的長編の物語である。この物語はブリクリウが催す酒宴の成り行きと武芸の腕試しの二部で構成されている。その主なテーマは英雄とは何者かである。酒宴の主ブリクリウに挑発されたクー・フリンとコナル・ケルナハとロイガレ・ブアダハの三人がアイルランドの勇者は誰かを競い合う。多少冗長な面もあるが、様々なエピソードが織り込まれたこの作品には、他作品との共通点も多い。

本発表では、この物語の内容や成立の背景について言及し、アイルランド語文学の他作品と比較して考察するが、そればかりではなく、他のケルト語文学作品などとも比較する。例えば、この物語は、最後に「首試し」によってクー・フリンが一番の勇者であることをクー・ロイ・マク・ダーリが宣言するが、この「首試し」のエピソードは『サー・ガウェインと緑の騎士』にも類似している。この物語のエピソードの背景や特徴について論じたい。

「聖母の恵みが貧困を退ける」—ハイランド土地戦争におけるカトリック教会の役割

Cuilidh Mhoire, is e tha cumail èis bhuap' (Shelter of Mary, that is what keeps poor away from you):
Catholic Social Pastoring in the Highland Land War

発表者：山 田 祐 育
(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)

Tasuku Yamada

Doctoral Student at Graduate School of Social Studies, Hitotsubashi University

本報告は、1880年代のハイランド土地戦争を、カトリック教会の司牧実践と社会的関与の観点から再検討するものである。従来の研究は、この運動を経済構造や階級関係を中心的論点としており、宗教的側面に言及する場合であっても主としてプロテスタンティズム、とりわけ福音主義の影響に焦点を当ててきた。その結果、同時代に相当数存在したカトリック共同体の実態は十分に検討されず、あたかもハイランドにおいてカトリシズムが周縁的、あるいは不在であったかのような歴史像が形成されている。本報告はこの偏向を批判し、1883年に実施された王立調査の史料に収録されたカトリック司祭の証言および、スコットランド・ゲール語詩人としても有名なアラン・マクドナルド神父の司牧実践を具体的事例として検討することで、カトリシズムが土地問題の認識と運動の展開に果たした役割を明らかにする。とりわけ司祭らは、教育制度における宗教的不平等や土地政策の不公正を批判し、公正地代や耕作権の保障、選挙権といった具体的要求を提示しており、地域社会の代表として政治的实践に関与していた。以上を踏まえ、本報告は、ハイランド土地戦争においてカトリシズムが共同体の宗教的背景にとどまらず、共同体が抱える経済的、制度的問題を吸収しつつ、それを社会的要求へと転化する実践的機能を果たしていたことを指摘する。

議題

1. 2025年度決算報告および監査報告
2. 2026年度予算について
3. 幹事改選結果及び2026年度～2028年度の幹事候補について
4. 会則の変更について
5. その他

報告

1. 来年度の研究大会について
2. その他

会場案内

〒811-1313 福岡市南区日佐3-42-1

TEL:092-575-2971(総務課)

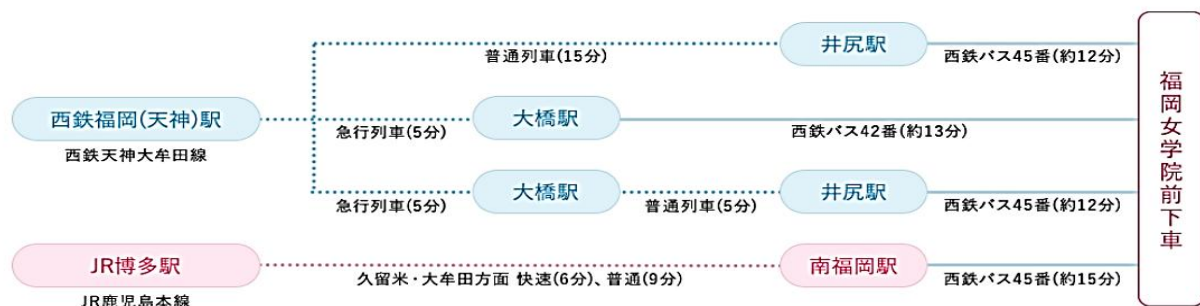
福岡女学院大学 3号館321教室・322教室

<周辺路線図>



<交通アクセス> <https://www.fukujo.ac.jp/university/access/>

本校は地下鉄の駅が近くになく、JR+バス、または西鉄電車+バスでアクセスするのが一般的です。具体的には次のルートがよく使われます。どちらも駅からバスで約10分ほどです。



鹿児島本線 南福岡駅から西鉄バス45番に乗車(約15分)

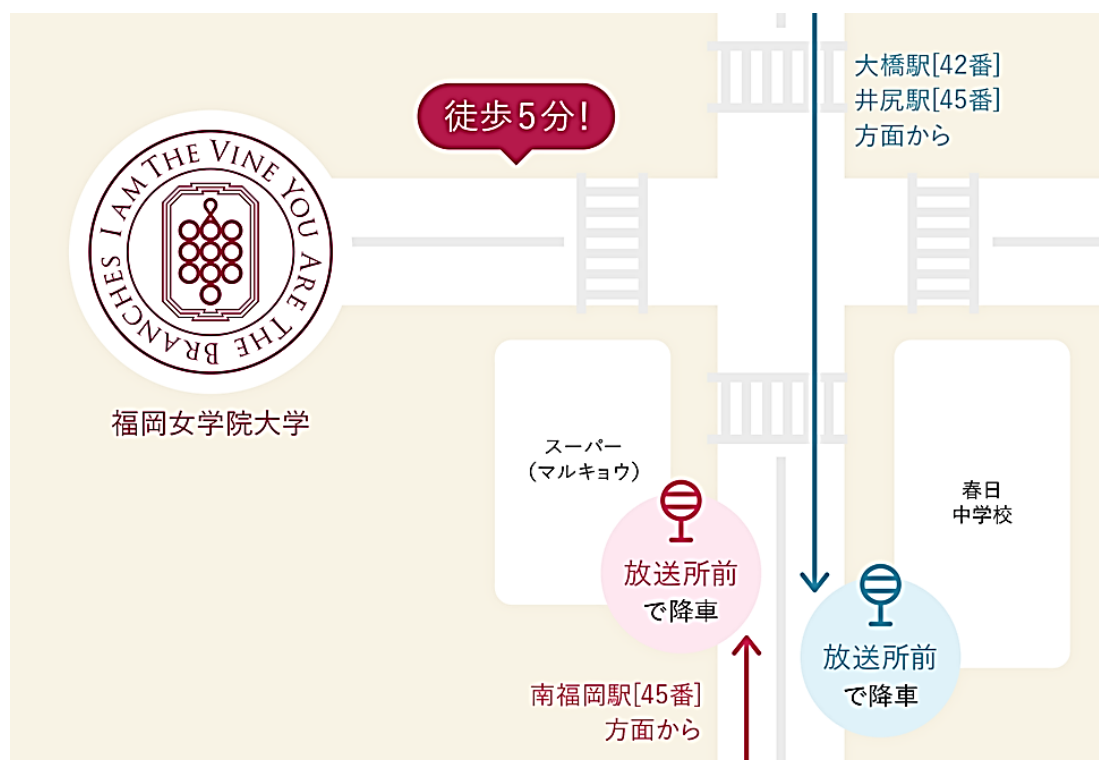
西鉄天神大牟田線 井尻駅から西鉄バス45番に乗車(約12分)

西鉄天神大牟田線 大橋駅から西鉄バス42番に乗車(約13分)

※本数が少なく、時間も若干長いですが、博多駅から乗り換えなしで行けるバスもあります。

博多バスターミナル〔博多駅〕⇒ 福岡女学院 西鉄バス45番

※日曜・祝日は福岡女学院前への西鉄バスの乗り入れはありません。「放送所前」から徒歩となります。



■宿泊施設

宿泊場所は「博多駅周辺」か「南福岡・大橋周辺」(大学に近い)にとると移動が楽です。

○南福岡駅周辺(大学に近い) 🗑️ 大学へのアクセス重視ならこのエリアが一番楽です

Minami-Fukuoka Green Hotel

- JR 南福岡駅近く
- 大学へ バス＋徒歩で約 20 分
- 出張・学会利用が多いビジネスホテル

Hotel Suihoukaku

- 同じく南福岡駅近く
- 比較的安い和風ビジネスホテル
- 朝食付きプランが多い

○博多駅周辺(交通便利・飲食多い) 🗑️ 空港からの移動や懇親会参加に便利

Hotel Nexus Hakata Sanno

- 博多駅からバス・タクシーで移動しやすい
- 新しいビジネスホテル

レジデンスホテル博多駅南

- 長期滞在タイプ
- 学会参加者に人気の価格帯

○天神・薬院エリア(地下鉄沿線で便利)

KKR Hotel Hakata

- 天神にも博多にも出やすい
- 学会・研究会で使われることが多い

Quintessa Hotel Fukuoka Tenjin Minami

- 天神徒歩圏
- 比較的新しいホテル